

## 「播磨産クチキコオロギ」

相坂 耕作

クチキコオロギは、関東以南の暖地に分布する樹上性の大きなコオロギである。なかでも兵庫県は日本における最初の発見地として知られ、それも淡路島でしか生息が確認されていなかった。筆者は幸い5年前、播磨地方で発見することができた。当時クチキコオロギは、淡路島しか生息しないものとされており、フェリーにでも乗って播磨地方へいったのかと、口の悪い人にいわれたほどである。時がたち、一昨年研究家により、但馬地方でもクチキコオロギの死骸が得られ、成虫も目撃された。また、日本のクチキコオロギは、熱帯方面に分布するものと別種説もあり、話題を提供する意味でも播磨産クチキコオロギの概要をお知らせしたい。尚、本文は兵庫県の環境管理課及び林務課発行の「自然とともに」の第26号に加筆修正したものである。

### 発見のいきさつ

筆者は以前からクチキコオロギは、なぜ淡路島にしか分布していないのか疑問をもっていた。ナガサキアゲハ等の分布を考慮すると、もし、播磨地方に分布しているとすれば揖保郡御津町及び赤穂市坂越方面と考えていた。9月中旬、条件の整った御津町の林に的を絞り探した。諦めかけたころ、桜の古木が空洞になっている大きな樹を見つけ、棒で叩いたところ大型のコオロギが飛び出した。まぎれもなく、短翅のクチキコオロギの雄である。それがきっかけで、以後4年間、累代飼育を避けるべく、現地より成虫や幼虫を補充しながら飼育観察してきたので、不十分ではあるがとりまとめた。

### 分布・生息場所

揖保郡御津町の海岸から近くの社業付近の照葉樹林に生息している。垂直分布としては、海拔2～3mから50mくらいの低い範囲に棲んでいる。

生息場所としては次の通りである。

樹上 樹皮下 瓦の下 立て看板の裏 石垣の隙間

樹洞穴 枝先 朽ち木の中 直径3cmくらいの枯れ

枝の中 樹株の根元 岩場の隙間 流木の中

冬期は地面に横たわる倒木（広葉樹・針葉樹は関係なし）や流木に潜んでいることが多い。

## 形態・生態など

一世代に2年を要するためと、餌の関係からか個体差はかなり違う。野外の成虫はエンマコオロギをしのぐものもかなりみつまっている。

鳴き声は飼育下では、ほぼ1年中鳴いている。しかし、1、2月は鳴き声は極めて小さい。ストーブ等で加温してやればけっこう鳴きだす。鳴き声がよく聞こえだすのは3月下旬ころの夜間からで、昼間はあまり鳴かない。5月下旬ともなればかなり大きく鳴く。夏場は「リー・リー」と大きく、「ギー・ギー」、「グイー・グイー」と低温時にと鳴き声が変わる。観察例の一つとして、1頭の成虫の雄を2週間隔離飼育した場合、1度も鳴かなかった。2週間後、もとに戻すと盛んに鳴きだした。雌の有無、集団飼育に関係があるらしい。

食性として、竹田俊道氏の文献（クチキコオロギの生態・煙島の自然、南淡町教育委員会発行1982）によると、ホルトノキ、松の樹皮、コケ類、セミの死骸、腐食土、テイカカズラの若芽、青菜類、ナス、キュウリ、マイナーフード、蜂の子等が記録されている。筆者も雑食性のクチキコオロギにいろいろ食べさせてみたところ、食べたもの、食べた痕跡のあるものは次の通りである。なお、果物類は水分補給かも知れない。

伊予柑	温州みかん	グレープフルーツ	リンゴ	桃
キウイフルーツ	スイカ	胡瓜	なすび	鯉節
食パン	クチキコオロギの死骸	朽ち木		
コオロギの餌(注)	キマワリの死骸	ビスケット類		

(注)台湾で鳥の餌用にフタホシコオロギをたべさせており、そのコオロギの飼育用のすり餌

野外の交尾はただ1例、立て看板の裏の木枠にて目撃した。飼育下ではよく観察している。すなわち、数回から十数回は交尾を繰り返している。産卵は飼育下では夜間21:00ころからが最も多くみられる。5月上旬からはじまり8月下旬ころまで続く。産卵場所は朽ち木の中に産卵管を差し込み産みつけるのが一番多く、砂中にも産みつける。時々樹皮間でも目撃するが少ない。

## おわりに

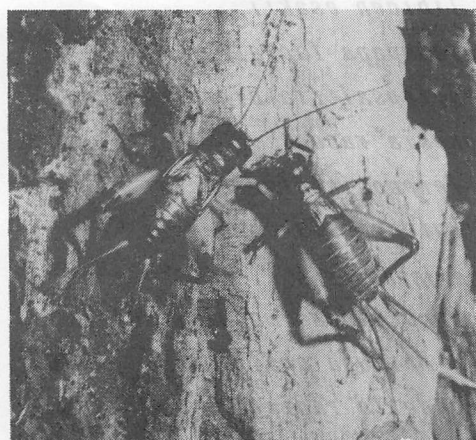
播磨産クチキコオロギは分布が極限され、数も少ない。生息場所が社業付近のため、一番怖い開発行為からは破壊される心配はない。しかし、反面、聖域整備のため寒中に動きの全く鈍感なクチキコオロギが越冬態のまま、朽ち木内で焚火

として燃やされてしまうことが多く危惧している。

淡路、播磨、但馬のクチキコオロギも、まだまだ分類学的にも生態学的にも不明なことも多くあり、今後の研究に期待し筆をおきたい。



伊予紺を食べるクチキコオロギの幼虫（飼育下）



クチキコオロギの成虫（右♀、左♂）